

JC-STAR★1取得のグリッドコード要件化、想定される現場の対応は 日本PVプランナー協会の森上代表理事に聞く

太陽光発電のパワーコンディショナ(PCS)は中国メーカーがシェアの大半を占めるとされる一方、グリッドコードの要件となる機器のJC-STAR★1取得を中国系が実現することは少なくとも当面、困難とみられている。こうした中、実際に機器を取り扱う施工業者などがどのような影響を受けそうなのか、エナジー・ソリューションズの代表取締役社長であり、施工業者やO&M事業者の業界団体「日本PVプランナー協会」の代表理事を務める森上寿生氏に話を聞いた。

-日本PVプランナー協会とは

森上 施工業者やO&M事業者など約160社が加盟している団体。住宅用から野立ての特別高圧、屋根置き of 自家消費型などの太陽光発電に加え、蓄電池も対象にしている。政府が掲げる2040年のエネルギーミックス達成には施工企業や人員が不足するとみられ、協会では企業数の拡大に資する活動や人員の育成支援を行っている。

勉強会を開催するだけでなく、その資料をインターネットで公開している、カテゴリごとに分類しているので、技術者が自ら勉強したり、新人社員の教育で使われている。

また、協会には全国展開するEPCから地場の施工業者まで加入しているが、彼らを結びつける、協力企業のマッチングプラットフォームのような役割を果たしている。

-協会内でのJC-STAR制度に対する理解や見解は

森上 会員企業の7～8割は中国製パワーコンディショナ(PCS)を使っている中、中国製ロガーの認証取得は当面、難しいとみられる。一方でJC-STAR制度はIP通信機器が対象であり、RS485通信のみの場合は対象外で、ロガーを認証取得品に変えれば従来通り使える。市場シェアの高い中国メーカーでも、すべての機器が使えなくなるわけではないが、こういった理解はまだ進んでいないと思われる。

FIPへの転換に係る既存設備の扱いなど、資源エネルギー庁からFAQが出されたことで、ある程度運用が明確になったのは良かった。それまでは、発

電所のPCSを分散型に切り替えたい会員から「どういうケースで対象になるのか」という不安の声もあった。

-実務にどのような影響が想定されるか

森上 現在大きなシェアを占める中国メーカー製品が仮に使えないとして、国内メーカーでも代替機器は供給できると思う。しかし、コストは上昇するだろうし、それを発電事業として吸収できるのか懸念がある。足元で拡大するPPAのプレーキになりかねない。

現場では例えば、RS485通信の中国製PCSにサードパーティーの認証取得ロガーを組み合わせることが考えられる。ただ、純正ロガーが持つ初期設定機能や故障のログ蓄積、ファームウェアアップデート機能までは代替が困難であり最大のデメリットだろう。初期設定だけ純正ロガーを使って、グリッドに接続する前にサードパーティー制交換することも考えられるが、手間になる。もちろん我々としても、純正ロガーとサイバーセキュリティの問題は理解しているので、ここは難しい問題だと思う。

また、系統用蓄電池事業、特に低圧は中国製の採用が多く、躊躇している事業者も多いと聞く。RS485通信はIP通信よりスピードが劣るというのも、



森上氏

事業の性質上、懸念になる。

-エナジー・ソリューションズでは、2つのJC-STAR★1取得機器を取り扱っています

森上 一つはエヌエスティ・グローバルの通信ルーターで、同社自身で認証を取得している。弊社の「ソーラーモニター」の中で通信と出力制御機器として利用している。

もう一つは台湾企業であるネクスクム製の産業製コンピュータに、弊社でサイバーセキュリティ対策を施し、「ESI-EMS-C」として認証を取得した。こちらは監視だけでなく自家消費の追従制御や蓄電池の充放電など制御系にも対応している。

このほか、弊社が手続きを行う形で、中国製蓄電池をベースにしたシステムの認証が取得できないか、メーカーと連携しており、現在申請を行ったところだ。